特230
478

郷土讀本 巻一

始

特230
478

郷土讀本

巻一

湯川小學校編

旭山よりの眺望

校歌

一

高く聳ゆる　白馬山
廣く續ける　日高平野
龜山城跡　勇ましく
昔の英雄　しのばれる

二

かゝる景色と　この歴史
見つゝ語りつ　學ぶ友
我が校訓を　身にしめて
此世に甲斐ある　人となれ

はしがき

こんど私達の學校に鄕土讀本をつくりました。これには湯川村や附近の村々の古いお話や新しいお話ばかりがのせてあります。この讀本を讀むと、自分たちの村にも、よいお話がこんなに澤山あるのかと、驚かされます。これは私たちの御先祖の立派なお働きによつて、この地方が古くからよく開けた土地であつたからです。

皆さんはこの讀本によつて、我が湯川村のほんとうの姿をしつかり胸にきざんで、御先祖の方々をはづかしめないよい湯川人となつて下さい。

昭和十年六月十日

日高郡湯川尋常高等小學校長

深見常三郎

郷土讀本 卷一

もくろく

一 亀山のながめ……一
二 湯川神社……四
三 千手觀世音菩薩……六
四 みこ淵……八
五 宮山……一四
六 日高言葉……一六
七 孝子久藏……一九
八 お藥師さま……二四

九　財部……二六
一〇　新池……二八
一一　子守唄……三四
一二　亀山と入山……三六
一三　觀音様の恵み……三九
一四　湯川村……四六

郷土讀本　巻一

一　龜山のながめ

龜山に登つて、頂上より見下すと、長い美穗の松原の向ふに、海原が遠く青空に連なり、点々と浮ぶ白帆、霞に包まれた日高川口、たくさんに並んだ御坊の家々、ほんとに繪を見るやうに美しい。町の手前には、ポプラの並木に圍まれた日高中學校の建物が、午後の太陽をうけて、一層白く光つて居る。

縱橫美しい模樣をなす田の綠の中を、うす樺色の熊野街道が、御坊から眞直ぐにこの麓をかすめて、北の方原谷まで延びてゐる。六粁にも達するであらう。又、綠の平野は、東西にも大きく廣がつて、山々の麓は、ぼんやり眠つたやうにしか見えない。

「ぴー。」と、ほがらかな音をひゞかせて、汽車は眞下に見える御坊驛に着いた。汽車を降りた人達が、陸橋を渡つて、改札口の方へ行く。客を乘せた一台の自動車が、驛前の廣場から眞直ぐに南の方へ走つて居る。御坊へ行くのであらう。又、二台續いて、廣場を走り出した。今度は、驛前から右に折れて、砂煙をあげながら西の方へ走る。

やがて、御坊町行の臨港鐵道も、財部の家々の間を縫つて走つて行く。

驛の東側に、片倉製絲會社の工場が見える。高い煙突から黑い煙がむく／＼とはき出されて居る。其の南に、こんもりした湯川神社の森が見え、續いて小松原の家々がぎつしり並んでゐる。其の東に、吉田・藤井と、日高川べりまで点々とつゞいてゐる。日高川は、霞のかゝつた鳶山のすそを、まるで大蛇のやうにゆつたりと西南の方へ白く流れて居る。

麓の方から、犬の鳴き聲が、のどかに聞えて來る。

二 湯川神社

亀山城に居られた湯川氏は、だん〳〵と榮えて、直光の時になつて、城だけではせまくなりましたので、今の片倉製絲所のあたりから湯川神社の境内にかけて、大きな屋敷をかまへ、威勢を四方にかゞやかしました。その頃、直光は屋敷の一隅に小さな祠を建てゝ、神明様をおまつりしました。

ところが、その子、直春の時に、お姫様が安らかにお産なさるようにといつて、富士山のふもとの淺間神社から、木花咲耶姫命のみたまをおむかへして、神明様のお社へ合せまつりましたが、まもなく、お姫様は御安産なさいました。直春は大へん喜んで、これはきつと神様のおかげだと思はれて、その御禮にお社をりつぱに建てられました。

このいはれで、湯川氏がたえた後も、お社はそのまゝにのこり、いつの頃からか、お産の神様として名高く、このお宮を子安神社と申す様になりました。

明治四十二年に、富安や丸山のお宮を、こゝへおうつしして後、湯川神社と申すやうになりました。今でも、遠近からのおまゐりが、ずゐぶん多いといふ事です。

三 千手觀世音菩薩

僕は、この間お母さんと圓福寺の境内におまつりしてある千手觀音樣へおまゐりしました。

禮拜がすんで、お堂で一休してゐると、和尚さんが來られて、千手觀音樣について、色々、お話をして下さいました。

和尚さんは、

「當山の千手觀音樣は、道成寺の千手觀音樣をおつくり申す時、御いつしよに、しかも同じ一本の木で、おつくり申したものですから、木目といひ、お姿といひ、全く同じで、實に立派な御像です。

後に、この觀音樣は多くの巡禮の背におはれて、諸國をお巡りになつて、大勢の人々をお救ひになりました。法順といふ和尚さんも、この觀音樣をいただいて巡られましたが、歸國の後、當時の龜山城主湯川政春に、護持佛としてこの觀音樣をさし上げられました。それから、この觀音樣は、湯川氏の屋敷内におまつりしてありましたが、天正十三年龜山落城の時、この觀音樣を、此の寺にお移し申しました。

世間の人々は、「ひも觀音樣。」と、言つてゐますが、之は國々を巡られる時つけたひもが、今も殘つてゐるからです。」

といつて、觀音樣を拜まして下さいました。

四　みこ淵

鹿ケ瀬の難所を越えられた弘法大師は、家々の門先に立つて、その幸福を祈りながら、萩原・荊木をすぎて、富安の里に入られた。

四時すぎの大陽は、いよ〱強く照りつけ、土用がれで、山の草木さへ力なくしほれてゐる。大師は、道ばたの木かげに、破れ笠をとつて腰を下された。全身から、汗は瀧のやうに流れ、色あせた衣は、すつかりぬれてゐる。

しばらくお休みになつて、又錫杖の音をたてゝ、富安の谷を下られた。とある家の門先で、鈴の音も高く、讀經を

つゞけてゐられると、四十歳位の女が、一握りの米を持つて出て來た。大師は、それをおしいたゞいて、

「甚だ申しかねますが、この暑さのために、非常に喉がかわいてゐますので、どうか、一杯の水を御接待下さいませんか。」

と、ていねいに申し入れられた。

女は、ふりかへつて、

「それは御氣の毒なことでございます。早速差上げ度いのですが、あの門先の井戸をごらん下さい。つゞく日照で、いつもの半分程しかありません。このまゝ、十日も雨が降らなかつたら、家内の飲水もどうなることやらと、心

配してゐる次第でございます。どうか、御出家様、又他所で御接待を御受けなさいませ。」

「さやうでございますか。そんなこととは知らず、とんだ御心配をかけてすみませんでした。」

と、大師はつかれた足の歩みも重く、とぼ〳〵と、其所を立ち去られた。

しばらく行かれて、大師は、又あるみすぼらしい家の前に立たれて、一杯の水を乞はれた。すると其の家の女、

「それは〳〵おやすいこと。この暑さでさぞお困りでございませう。どうぞ、しばらくお待ち下さい。すぐ汲んでまゐりますから。」

と言つて、桶をさげて谷の方に下りて行つた。

大師は、氣の毒に思はれて、女のあとを追つて行かれると、女は、筧から落ちる糸のやうな雫を水がめにあつめたのを、せはしげに桶に汲み入れてゐる。

「これは恐れ入ります。こんなこととは知らず、とんだ御厄介をおかけいたしました。」

「いえ〳〵、いつもなれば、飲水ぐらゐは、裏の井戸にあるのでございますが、永らくの日照りで、それもかれはててしまひました。この谷も御覽の通りでございます。けれども飲水よりも、田の草も取れないあの稻が心配でございます。」

と、女の指さす方の田を御覧になると、今植ゑたかと思はれる程の小さな稲が、道ばたの草よりも黄色くしほれてゐるではないか。

「あゝ、お氣の毒。」

と、錫杖をつきたてたまゝ、しばらく合掌せられてゐた。すると、おゝ不思議。大師の錫杖をおつきになつた所から、水がこん〳〵とわき出て、谷川が音をたてゝ流れ出した。女は、思はずひざまづき、

「おゝ有難や、旅の御坊。只のお人ではございますまい。どうか、御名を御聞かせ下さいませ。」

「いや〳〵、これは、あなたの御心がみ佛に通じたもの、

私がえらいのではありません。私は名もない旅の者……。」

と、一杯の水を飲まれて、立ち去らうとせられた。

あまりのことに、氣をとられながらも、女は、なほも後から追ひすがつて、

「あのー、御坊ー、生佛さま。もしや、高野山の……。」

破れた笠の中で、かすかにうなづかれる様子が見えた。

「あゝ、もつたいない。それでは……。」

と、女は合掌したまゝひざまづき、いつまでも〳〵、後を見送つた。

かうして出來たみこ淵は、其の後、どんな日照の時でも、

この淵から下流は、常に水が絶えないが、上流の方、加茂坂とみこ淵との間は、すぐ空になつて、一滴の水もなくなるのである。

五宮山

龜山の西南のふもとに近い尾は、きつたつたがけになつて、茶褐色の地はだをあらはしてゐます。がけの下は、一面の平地になつてゐて、廣さは、凡そ七アール位あります。その西の方は、畠で夏蜜柑や野菜が作つてあり、又東の方は、荒地で草が生ひ茂つてゐます。このあたりを、宮

山といひます。

宮山は、五六年前までは、道ばたからがけの上の所まで、まんじゆう笠をもたしかけたやうに丸くなつた雑木山でした。それが、縣道や鐵道をしくために、この山の土を使つたので、山のすがたが、今のやうにかはりはてました。

この山には、二十五・六年前までは、和田の御崎神社からおうつし申した齋神社が、おまつりしてありました。そして、この宮山全体がお宮の境内で、幾かゝへもある老いた杉・檜などが枝をまじへて、晝も暗いまでに、こんもりとした森でした。ところが、明治四十二年に、このお宮が、湯川神社へうつされてまもなく、惜しいことに、森の老木は皆

伐りはらはれました。
かういふいはれで、この山を宮山といふのです。

附記

昔、この宮山に雷が落ちて、里人を苦しめた時、神樣がお出ましになつて、雷をいましめられました。それから後、この山へは一度も雷が落ちないといふので、一名雷山ともいはれてゐます。

六 日高言葉

夏休に大阪の叔父さんが、遊びにいらつしやつた。僕は、
「叔父さんのお家の前を、ぜんしやが通りますか。」
と尋ねた。すると、叔父さんはにこ〳〵笑ひながら、
「でんしやは、たくさん通るが、ぜんしやは、一つも通らない。」

とおつしやる。
僕は其のわけがわからないから、
「どちらも同じではありませんか。」
といふと、叔父さんは、
「でんしやをぜんしや、ぜにをでに、といふことは、この地方の人にはよくあることで、あまり何とも思つてゐないが、他所の人には、大そう妙に聞えるのだ。だとざ、でとぜ、どとぞは、はつきり言ひ分けねばならないのだが、あまり區別が出來てゐない。甚だしいのになると、でんしやをれんしや、ぜにをれに、と云つて、だ、ざ、で、ぜ、れ、ど、ぞ、ろを、はつきり云ひわけられない人もある。これは、日高言葉の惡い

ところであるから、注意して正さなくてはならない。しかし、私は時々故郷にかへつて、小さい時から聞きなれた日高言葉で語られる皆さんのお話をきくと、大そうなつかしい感がする。」

と、話して下さつた。

正	誤
ダ行……**ザ**行	
からだ	カラザ
のど	ノゾ
でんわ	ゼンワ
ザ行……**ダ**行	
ざつし	ダツシ

正	誤
かぜ	カデ
ぞうきん	ドウキン
ダ行……**ラ**行	
からだ	カララ
でもの	レモノ
こども	コロモ

正	誤
ラ行……**ダ**行	
らいねん	ダイネン
うれしい	ウデシイ
ろうか	ドウカ
ザ行……**ラ**行	
すずり	スルリ

正	誤
さんじゆつ	サンリツ
ざしき	ラシキ・
ラ行……**ザ**行	
ちりめん	チジメン
りん	ジン
るす	ズス

七 孝子久蔵

寛(くわん)政の頃、下富安の里に喜兵衛と言ふまづしい農夫が、住んで居ました。

その喜兵衞さんには、久藏さんといふ一人息子がありましたが、かはいさうにも、生れつきの啞でした。お母さんのなつさんは、我が子を近所の子と見くらべては、「どうして、久藏だけが、物が言へないのだらう。」と、いつもなげいて居られました。近所の人たちも、「あの眞面目な喜兵衞さん夫婦に、どうしてあんな子供が生れたのだらう。」と、大變氣の毒がつてゐました。

久藏さんは、十歳の頃から、隣村へ子守に行きましたが、手眞似で子供をよくいたはりました。主人から時々菓子や果物などをいたゞきますと、それを大切にしまつて置いて、休の日に、我が家に持つて歸つて、父母と一しよにそれを食べて、喜こんで居ました。

さて、久藏さんがまだ二十歳の時、お父さんの喜兵衞さんがなくなりました。すると、ひとりになつたお母さんのことを心配して、休の日には、飛んで歸つて、肩をたゝいたり、水を汲んだりしてなぐさめました。ですから、皆の人が仕事を休んで遊んでゐる日でも、田を耕やしたり、肥をやつたりしてゐる久藏さんの姿を、よく見かけました。近所の人も、主人も、大そう感心してほめました。

奉公をやめて、お母さんと一しよに暮すやうになつてからは朝は人々よりずつと早く起きて、一日中の食物をこしらへ、それをお母さんの側において、自分は近所の家

に働きに行き、夕方歸ると、お母さんをなでさすり、寒い時は炬燵や火鉢のかはりに、お母さんの足をふところに入れて暖め、夏は團扇であふいで、よく寢入るまで介抱して一日もなまけたことはありませんでした。年老いたお母さんは、子供のやうに、餅・饅頭などを喜ばれるので、菓子のない時は、夜中もいとはず、約一粁もある道成寺前の茶店の戸をたゝいて買つて來て、お母さんの笑顔を見て喜んでゐました。

お母さんは、いつも、久藏さんの孝行を喜こんでゐられましたが、九十四歳でなくなられました。其の時は、もう久藏さんも七十四歳の老人でしたが、尙毎日お母さんの御位

牌に、生前好まれたものを、取りかへ〳〵、供へてゐました。

久藏さんの孝行な評判は、だん〳〵と高くなり、つひに紀州のお殿樣に聞こえました。お殿樣も大層感心されて、御褒美として、其れから毎年米十俵づゝ下さることになりました。

生れつきの啞でありながら、かくも親孝行な久藏さんは、九十四歳まで長生して、安らかになくなりました。人々は、この尊い久藏さんの一生をながめて、大そう其の死を惜しむと共に、里の誇と考へました。今、其のお墓は下富安の大溪寺にあります。

八　お藥師さま

「かねがなる。おゝ、早がねが………。火事だ〳〵。どこだらう。」

見れば、藥師谷山が赤いほのほをあげて、さかんに燃えてゐる。見る〳〵うちに、藥師堂のすぐ側まで、燃えうつつて來た。大勢の人々は、

「せめて藥師堂だけは、無事であるように。」

と念じてかけつけましたが、はや、火ば御堂にうつつて、またたくうちに、物すごいひゞきと共に棟木が燃え落ちてしまつた。まもなく火事はおさまつたが、人々は、

「おゝ、もつたいないことだ。あのお藥師さまをおうつし申すことが出來なかつて。」

と、口々に言ひ合つた。

幾日かたつて、上富安のお百姓が、田へ行くと、あの藥師堂のお藥師さまが、田の中に居られた。

「あゝ、もつたいない。これは、きつと、あの火事の時、お一人で此所までおのがれなされたのであらう。」

と、ていねいにいたゞいて、萬福寺におまつり申した。村の人たちも、この不思議に感じて、盛なおまつりをして、一層深く信仰するやうになつた。

九　財部

今から、凡そ千二百年前、文武天皇の大寶三年五月の事でした。お上から、我が日高郡へ、銀を奉るやうにとの仰が下りました。郡の人たちは、この有難い仰をいたゞいて、大そう喜び、早速、銀を掘出して奉る事に致しました。

その頃、今の財部のそばを、日高川が流れてゐましたから、交通が便利で、郡内で一ばんよい場所でありました。そこで、この土地に銀座といふ銀の仕上げ場をこしらへて、製造にとりかゝりました。山奥から掘出した銀の石は、日高川を下して銀座に運ばれ、そこで吹き分けて銀に仕上

げると、すぐ船につんでお上へ奉りました。それで、この銀座のあつた所を、たからこ呼ぶやうになつたのだそうです。

それから後、元正天皇の御代に郷を定められました時、日高郡内を内原・財部・清水・石淵・餘戸・南部の六郷に分けられました。その頃の財部郷とは、今の財部を中心に、和田・松原の全部と、御坊・湯川・藤田・矢田の一部分までもふくんだ大きなものです。

その後、時代がうつり、人がかはつてゐますが、財部といふ地名だけは、今も昔のまゝに殘つてゐます。

一〇 新池

田植時になつて、新池の樋がぬかれると、すみきつた水が、どの小溝（みぞ）にもあふれる程流れ出ます。この水は、上富安・下富安・荊木の三ヶ字に流れて行つて、二百ヘクタールの田地に引かれるのです。

昔は、この池がなかつたので、雨水をたよりに稲を作りました。それで日照がつゞくと、すぐ水が足りなくなつて、せつかく立派に育つた稲を、見殺しにしなければならない事が度々ありました。そんな時には、お百姓たちは、心配顔で空をながめながら、雨の降るのを祈るより他はあ

りませんでした。

今から百餘年前、荊木に柏木淺右衛門さんと言ふお百姓が住んでゐました。淺右衛門さんは、大そう眞面目な考へ深い方でしたから、若い時から、どうかして、大きな池を掘つて、村人たちの難儀を救ひたいと考へてゐました。しかし、自分一人の力では、どうすることも出來ませんでした。

三十二・三歳の頃、來る年も來る年も、雨が少くて、大不作がつゞきました。淺右衛門さんは、村の人たちの難儀を見ては、もう、じつとしては居られなくなりました。たとひ、どんな難工事でも、一身を打ちこんでかゝれば、出來

ないことはあるまいと決心しました。しかし、池を掘るには、ふしんの方法を習ふ事が肝心だと思つて、家業をすて、妻子を殘して、ただ一人和歌山に上り、土手のきづき方、溝の掘り方等を、熱心に研究しました。十年間、一心不亂にはげんだ甲斐あつて、とう〳〵立派なふしん方となりました。そして、天保八年一月喜び勇んで、荊木に歸りました。

いよ〳〵、上富安の東谷に、新しい池を掘ることにきめて、三ケ村の人たちを集めて、其のもくろみを話しました。しかし、村の人たちは工事があまりに大きくて費用がかさむので、なか〳〵賛成しさうにありませ

三十四貫八百四十匁は米四百七十石程に當る當時に於て一日の人夫賃は米一升でした。

んでした。淺右衛門さんは自分の全財産を賣りはらつて、其れを元手として一萬人伊勢講をつくり、其の掛金の幾分を工事の費用にあてることにして、やつと村人たちの賛成を得ました。又一方、村々の庄屋さんたちから、藩へ助けを願ひ出ました。其の時のもくろみは、堤の長さ百四十二米、樋の長さ三十七米、人夫一万七千四百二十人、費用三十四貫八百四十匁と言ふ大工事でありました。

淺右衛門さんは、此の工事の監督となつて、朝はやくから、夕方おそくまで、堤の上に立つて、多くの人夫をはげましました。しかし思つたやうに工事が進みませ

ん。一度つくつた樋が、どうしたわけか水が止りませんから、せつかく築いた堤をこぼつて樋を取りかへました。そんな事で費用も思ひの外かさんで來ました。

淺右衛門さんの苦心は、なみ〳〵ではありません。しかし、もとより、一身をささげてかかつた工事ですから、どんな苦勞もいとはず、一心に工事をすすめてゐましたが、とう〳〵病にかゝり、天保九年の春、四十二歳の働きざかりで亡くなられました。工事が出來上るのをまたないで亡くなられたのですから、さぞ心殘りに思はれた事でせう。又、村の人たちも、どんなに力を落した事でせう。

其の後、三ケ村の庄屋さんたちが監督となつて、工事をすすめ、入山組・天田組の大庄屋さんたちが、骨を折つて費用をととのへましたから、着手してから三年目に、さしもの大工事も、立派に出來上りました。

なみ〳〵とたたへた池水が、白泡を立て勢よく流れ出る有樣を見て、村人たちはどんなに喜んだ事でせう。又、淺右衛門さんや庄屋さんたちの苦心を、どんなに有難く思つた事でせう。

今、圓福寺の庭にある淺右衛門さんの立派な碑は、明治四十年四月、七十年の法事をいとなまされた時、昔の恩を忘れぬ三ケ字の人たちによつて、建てられ

たものです。

二 子守唄

ここは小松原、この向ふ天神、
あそこ津井切・藤吉田。
財部通れば、空見ておいで、
花の丸山星月夜。
金をまかぬに鐘巻道成寺、
松も植ゑぬに小松原。

小松原には旦那衆五軒、
酒屋三軒、寺二軒。
ねんねねた子に赤ばいきせて、
ねんねせん子に縞のばい。
日高川には蛇があるさうな、
大きな蛇じやそな、うそじやそな。
わせのいとはん、もうねるさかに、
だれもやかまし言ひよすな。

だれもやかまし言はへんけれど、
寺のぼんさんかねたたく。

泣くな一太郎、泣すな二太郎、
何が泣かそに三太郎。

子守したとて、暇ある時は
文字やお針をけいこせえ。

一二 龜山と入山

昔、辨(べん)慶(けい)が、故郷の熊野へ歸る時のことである。辨慶

は、久しぶりに歸るのだから、何かよい土産物はないかと、色々と考へたすゑ、

「よし、自分は世に知られた千人力だ。一つ故郷の人々を驚かしてやらう。」

と、山を一荷(が)になつて歸ることにきめた。

そして、丸形の山と、細長くて曲つた芋(いも)のやうな山とをさがし出し、それをまはり一米半ばかりもある綱(つな)でしばつて、長さ千米、さしわたし五米位の朸(あふこ)で、

「どつこいしよ。」

と、掛聲勇ましくになつて、京を出立した。

どすん〳〵、ぎゆつ〳〵、と歩きつづけ、鹿ケ瀬峠も越

えて、つひに廣い日高平野へ出た。　ところが、朝からのつかれのために、

「まあ、一ぷくしよう。　やつこらせ。」

と、腰を下さうとしたはづみに、ばり〳〵、どゞんと雷のやうな音をたてて朸は折れ、地震のやうなひびきと共に、二つの山は地の中へ深くはまり込んだ。

かうなつては、さすがの千人力の辨慶が動かさうとしても、もうだめである。　たうとう、二つの山は大地からはなれなくなつた。　其の時の丸形の山が亀山で、細長く曲つた山はあの入山だといはれてゐる。

一三　觀音樣の惠み

今から千二百年程前、九海士(あま)の里に、夫婦の漁夫が住んで居ました。　夫の名を早鷹(はやたか)、妻の名を渚(なぎさ)と言ひました。　四十をすぎたのに、まだ子供がありませんので、二人は、毎日氏神樣へお參りして、

「どうぞ子供をおさづけ下さるやうに。」

とお願ひしました。

まもなく、玉のやうな女の子が生れました。　早鷹は

「やあ、よく產んでくれた。　めでたい〳〵。　これも神樣のおかげだ。」

といつて、毎日のやうに、赤ん坊を覗きこんでゐました。しかし、ふしぎにも、生れた赤ん坊には、頭に髪が一本も生えてゐません。月日がたつても、やはり生れたまゝのつる〱坊主です。夫婦はあけくれ娘の頭をなでて、

「なぜ髪が生えないのだらう。どうかして………」

と悲しんでゐました。

或年、九海士の沖に怪しい光がして、毎日不漁がつづきました。その中に、誰いふとなく、

「あの海の光るもののためだ。あれを拾ひ上げて村のなんぎを救ふものがなからうか。」

と云ひ出しました。渚も村の人たちの困つてゐるのを、じつと見ては居られません。どうかして、あの怪しいものを取除いてあげる方法はあるまいかと、いろ〱考へた末、遂に決心して、女の身で、たゞ一人、ざぶんと海の中へ飛びこみました。海の底はまるで晝のやうです。渚は夢中になつて光るものを拾ひ上げました。見れば、黄金の佛像で、み丈一寸八分ありました。渚は喜んで、その佛像を自分の内へおまつりして、朝夕拜んでゐました。

或夜夢の中に、

「我は、汝に助けられた觀世音であるぞ。汝の慈悲深

い心に感じ、何なりとも願ひはかなへてやらう。」
と申されました。渚は、
「それは、まことに有難いことでございます。どうか、ふびんな娘に、髮をおさづけ下さいませ。」
とお願ひしました。
　このことがあつて、しばらくすると、ふしぎにも娘の頭にうすく髮が生えて來ました。夫婦はこおどりして喜んで、
「これはみな觀音樣のおかげだ。有難や〳〵。」
と、二人は一層觀音樣を信仰するやうになりました。娘の髮はぐん〳〵のびて、二米あまりの美しい黑髮と

なり、村の人たちは、いつか髮長姫と呼ぶやうになりました。渚は
「この黑髮は觀音樣からいただいたのだから、たとへ一筋でも粗末にしてはならぬ。」
と、常に娘をいましめてゐました。姫は髮の脱(ぬ)け毛を大切にして、木の枝にかけておきました。
　或年、奈良の都の御殿の軒端(のきば)に作ったつばめの巣から、長い〳〵髮の毛がたれてゐました。右大臣藤原不比等(ふひと)は、それに目を止められて大そうめづらしがられ、家來に命じて、この髮の主をたづねさせましたが、つひに、日高郡九海士の里に、髮長姫の居ることがわ

かりました。そこで、すぐ姫を都へ上らせて、わが屋敷へ迎へました。姫は生れつき、姿も心も美しい方でした上に、都にゐて色々修養せられましたので、實に立派なお方になられました。不比等は大そうかはいがられ、ついに、自分の娘として、名を宮子姫と改めさせ、文武天皇の御妃として奉りました。

宮子姫は御殿の奥深くゐます御身となられましたが、ふるさとにおまつりしてゐる觀音樣を御信仰なされて、都の空から明けくれ拜んでゐられました。天皇はこの御樣子を御覽になり、姫から觀音樣の有難いいはれを、くわしくお聞き遊されて、大そう御感心遊ばし、

紀道成に命じて、姫のふるさとにお堂を建てさせられました。これが今の道成寺で、この寺の名は、道成の功をあらはされるために、つけられたものです。尙義淵僧正に命じて、一丈二尺の觀世音菩薩の御像を彫ましめられ、奈良の都の方へ向けてまつり、その御胸に、かの一寸八分の觀音樣をおさめさせられました。安珍・清姫で名高い道成寺、櫻の名所で名高い道成寺はこんな有難いいはれによつて建てられたのです。

一四　湯川村

日高平野は龜山を中心にして、約三千米程の半徑で擴がつてゐて、和歌山縣では第二の平野である。わが湯川村は、この大平野の中央の最もよい部分と、北方の白馬山脈の山地とからなつてゐる。

面積は約八・六九九平方粁で、東内原村の一四・七七六平方粁、矢田村の一八・四九三平方粁に比べると小さいが藤田村の三・五〇一平方粁、御坊町の三・〇三八平方粁よりもはるかに大きくて、日高郡中では第二十七位である。

北の方、白馬山脈中の最も高い峯は五〇〇米程あつ

て、この地方での高山である。北部の山地に降つた雨は、東谷と薬師谷の兩方の谷に分れて流れ落ち、東谷の水は新池に、薬師谷の水は薬師谷池に溜り、更に合流して富安川となつて上富安・下富安の眞中を南へ流れる。それが十力で吉田川と出合ひ、それから西に折れ亀山の南を流れて、このあたりから齋川と名をかへ、下財部から田井を通つて、西川へ入つてゐる。ふだんは「から川」と言はれる程水量が少いが、一たん大水となると、川幅がせまい上に堤が小さいから、水が四方にあふれて、附近一帶が川の様になつて流れる。

平野部には、熊野街道・道成寺街道等の諸縣道をはじ

め多くの道路が四方に通じてゐる。近年、紀勢鐵道が開通して、御坊驛が村の中央におかれた。又臨港鐵道が御坊驛を起點として、御坊をへて日高川口までしかれ、驛前からは自動車道路が、幾條となく、網の目の樣に諸方に通じてゐる。

湯川村の戸數は約六七〇、人口は約三七〇〇、あつて戸數も人口も郡內第六・七位である。今、之を大字別にすると、次表のやうになる。

湯川村戸數人口字別表（昭和十年五月調）

	富安	丸山	小松原	財部	計
戸數	二五七	七六	一五四	一八七	六七四
人口	一三〇二	三八九	九九〇	一〇〇〇	三六八二

六七四の戸數中には、農業は三九八、商業は六一、工業は二七、其他は一八八である。湯川村は農業によつてたつて行く村であることが、この表によつてもわかる。

耕地も多くて、田は三五〇ヘクタール、畑は二六ヘクタール、山林は四三五ヘクタールあつて、田は郡內第一位である。

産物もほとんど、農産物ばかりで、米・麥・夏蜜柑・除蟲菊等は其の主なものである。中でも米の産額は、約一九五九俵（五ヶ年平均）で郡內第一である。夏蜜柑は、十數年前からだんだん多く植付けられるやうになつた。

これは、この地方が氣候が暖かく、地味もよく適してゐるためである。除蟲菊は昭和八年度には一〇、四三二圓の產額があつたが、其後乾菊の値上りにつれて、作付段別もにはかに增えた。此の他、特別の產物には、片倉製絲工場から出來る生絲、パッピーミルク會社のミルク、牛乳組合の牛乳等がある。

我が湯川村は、位置もよく、產物も多く、交通も便利で、非常に惠まれた村である。こんな豐かな村に生れ、美しいながめを友として、立派な學校で樂しく勉强の出來る私たちは、まことに幸福なことである。

昭和十年六月十日印刷
昭和十年六月十五日發行

和歌山縣日高郡湯川尋常高等小學校長
著作者 深見常三郎

和歌山市四番丁一番地
印刷者 山崎峯

和歌山市四番丁一番地
印刷所 和歌山日日新聞社印刷部

發行所 和歌山縣日高郡湯川尋常高等小學校

終